

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第74号

平成22年 7・8・9月



国宝 金剛力士立像(法華堂所在) 阿形 奈良 東大寺

特別展

なら仏像館開幕記念特別展

至宝の仏像

東大寺法華堂金剛力士像特別公開

7月21日(水)～9月26日(日)
なら仏像館(本館)

特別展

特別展

仏像修理100年

7月21日(水)～9月26日(日)
東新館

平常展

中国古代青銅器

7月21日(水)～9月26日(日)
青銅器館(坂本コレクション)

※この期間、青銅器館への入場には
特別展の観覧券が必要です。

仏像修理100年

7月21日(水)～9月26日(日)

会場…東新館

近代的な仏像修理は明治三十一年(一八九八)に始まり、それ以来、百十年余の歴史があります。この展覧会は、その内容豊富な仏像修理の歴史と意義を紹介するものです。

いわゆる文化財として修理される仏像は、必ず修理箇所を明記した解説書と、補足・補修箇所を色分けした修理図解が作成され、修理前・後の姿が写真撮影されています。このような修理記録は岡倉天心の構想のもとで始まった仏像の近代修理の特色です。一例として本誌「展示品のみどころ」で平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩像(一九〇五～〇六年修理 以下括弧内の数字は修理年度)を紹介しています。国宝ないし重要文化財の仏像の修理は、天心が創設した日本美術院(東京)、その後独立した美術院(奈良)の修理技術者によって行われました。

大正十二年(一九二三)の関東大震災で鎌倉の仏像は壊滅的な被害を受けましたが、その復興のために派遣されたのは美術院の職員でした。鎌倉地方の屈指の名作である円応寺の初江王像(図1)はその時に修理された仏像のひとつです(一九二三～二五)。戦中・戦後の二十一年間の長期にわたって行われたのが三十三間堂の千手観音像(図2)の修理です(一九三六～五六)。戦時下の社会が厳しくても、あるいは戦後の混乱期にあつても、修理が中断されずに続いたことは特記すべきことです。

戦後、美術院は本部を奈良から京都に移し、昭和四十

三年(一九六八)には財団法人化され、大きな修理も行っています。

仏像を十分に研究した上で修理をする、という修理の理念は百年

も前に岡倉天心が述べていることですが、法隆寺中門の塑造仁王像(一九六一～六四)や東寺千手観音像(一九六五～六七)の修理では修理委員会を組織して十分に検討協議されました。修理は伝統的な修理技法に加えて、合成樹脂という新しい修理材料を援用して行われています(図3)。東大寺南大門の仁王像(参考図版)はこれまで経験したことのない巨大な木彫の修理で(一九八八～九二)、修理者側の体制づくりが重要な課題でした。東大寺法華堂の塑造弁才天立像(一九九三～九五)は塑造の解体修理としては前例のないものでした(図4・5)。大分・臼杵石仏の修理(一九七八～九三)(図6)では、古園石仏の母岩から落下していた大日如來の頭部が元に復位され、造像当初の雄姿が復活しています。

本展では、実物資料に加えて模型や写真・記録を展示し、仏像修理の内容を詳説します。ぜひ足をお運び下さい。



図1



図2



図3 東寺千手観音立像 上半身模型(樹脂製)



図4 弁才天立像 模型 修理前



図5 弁才天立像 模型 修理中



図6 大日如來像 頭部模型



参考図版

特別展

なら仏像館開幕記念特別展

至宝の仏像

東大寺法華堂金剛力士像特別公開

7月21日(水)～9月26日(日)

会場：なら仏像館(本館)

七月二十一日にオープンする特別展「至宝の仏像」は、奈良国立博物館で寄託を受けている仏像、また奈良国立博物館の所蔵する仏像のなかから、選りすぐった名品を一挙公開するものです。国宝・元興寺薬師如来立像や国宝・東大寺誕生釈迦仏立像及灌仏盤、また国宝・岡寺伝義淵僧正坐像のような名像のほか、石清水八幡宮旧蔵の毘沙門天立像や白山信仰の所産である金剛童子立像、南都伝来の南無仏太子立像など、当館が近年に収集した作品、あるいは長年お預かりしながら、諸般の事情により、これまでほとんど展示の機会をもたなかった仏像にもお出ましいただくこととしました。展覧会としては初公開に近い作品も少なくありません。

くわえて、東大寺法華堂に安置される奈良時代の脱活乾漆造の巨像、金剛力士立像の出陳もかなうこととなりました。これは法華堂の須弥壇の耐震工事

にあわせ、堂内の諸尊も保存修理の運びとなり、力士像も修理工房へ搬入される前、当館内にて待機していただくこととなったものです。この機会に、東大寺のご高配をえて、広く一般に公開させていただくこととしました。天平盛期を代表する忿怒尊の迫力を、間近にご堪能いただきたいと思います。

明治二十八年(一八九五)に開館した「旧奈良帝国博物館本館」は、長く仏像展示館として機能しつづけてきました。和辻哲郎や会津八一、亀井勝一郎ら、幾多の文人や学者、芸術家が訪れ、名文を生み出した場所でもあります。今回の展覧会に合わせ、この建物を新たに「なら仏像館」と名づけ、かつ全室にスポット照明のための工事をほどこし、仏像の魅力をより引き出せるよう努力いたしました。ひとりでも多くの方にくりかえしお越しいただける「なら仏像館」になるよう努めたいと思います。



国宝 誕生釈迦仏立像及灌仏盤 東大寺



国宝 伝義淵僧正坐像 岡寺



国宝 金剛力士立像(法華堂所在) 吡形 東大寺



国宝 金剛力士立像(法華堂所在) 阿形 東大寺



国宝 薬師如来立像 元興寺



毘沙門天立像 奈良国立博物館



金剛童子立像 奈良国立博物館



南無仏太子立像 奈良国立博物館

山城国道澄寺の興亡

——栄山寺鐘銘から公家日記まで——

野尻 忠（当館学芸部研究員）

奈良県五條市の栄山寺に、延喜十七年（九一七）の銘文を持つ梵鐘がある。古来よりその美しさをもって知られ、特に、池の間四区に陽刻された銘文（挿図参照）は、完成度の高い文章と堂々たる書体から、菅原道真撰文、小野道風筆とする俗説が生まれるほどに注目を集め、貞観十七年（八七五）の年紀を持つ神護寺鐘と並んで、古鐘銘の双璧と評されている。

栄山寺の現地に立つと、梵鐘本体の造形に魅了されるのはもちろんのこと、鐘は静寂の空気に包まれた伽藍、そして背後に迫る山景とも調和して、この上ない雰囲気を楽しむことができる。

しかし、私たちが栄山寺でこの鐘を見ることができるのは、実は偶然の賜物である。というのも、この鐘は本来、山

城国紀伊郡の深草郷（現在の京都市伏見区）にあった道澄寺の鐘として鑄造されたもので、安土桃山時代以前に道澄寺を離れ、大和国の栄山寺に帰したものである。

銘文によれば、道澄寺は藤原朝臣（道明）と橘朝臣（澄清）が力を合わせて建立し、両者の名から首字一字ずつ（「道」と「澄」）をとって寺名とした寺院であり、両者のうち藤原道明が主体となつて梵鐘を鑄造し、延喜十七年（九一七）にそれが完成したという。

道澄寺の創建は、別の史料から延喜三年（九〇三）と考えられる。鐘が造られた延喜十七年には、伽藍もほぼ整っていたであろう。延喜二十一年（九二一）には、前年に没した藤原道明の追福供養が道澄寺で執り行われている。そして十世紀半ば以降、藤原道明の子孫やその縁者によって、道澄寺で毎年のように法会が行われており、その執行は長元五年（一〇三二）までの記録が残る。しかし、長元五年以降の道澄寺についてはほとんど史料が残らず、不明な点が多い。鎌倉時代の『拾芥抄』に「道明澄清二人合力建立」との記事がある程度で、遅くとも安土桃山時代（十六

世紀）までにはいったん廃寺となっていた。現在法灯を継ぐ道澄寺（京都市伏見区深草直達橋）は、江戸時代に再興された新しい寺である（史料上の初見は宝暦四年（一七五四））。

それでは、道澄寺が廃寺となった時期は、具体的にはいつ頃であろうか。この点については、①鎌倉時代に荒廃したとする説（大石良材『道澄寺』『平安時代史事典』、角川書店、一九九四年）、②応仁・文明の乱（一四六七～七七）の時期とする説（『京都市の地名』、平凡社、一九七九年）、③室町時代後期以降と想定する説（福山敏男『栄山寺八角堂の研究』、一九五一年）、④豊臣秀吉による桃山城築城の際とする説（著者不詳『栄山寺鐘銘詳解』、一九五六年）などが出されているが、どの説にも確たる根拠がないというのが実情である。

そのような状況のなか、最近になって、筆者は室町時代の道澄寺に関わる史料の存在に気付いた。

室町時代後期の公家である広橋守光（一四七一～一五二六）の日記『守光公記』には、彼の手元を経由した数多くの文書・書状類が書き写されている。そのなかに、永正九年（一五一二）閏四月十八日の女房奉書があり、そこに（深草の）「道澄寺」の名がみえるのである。これによって、道澄寺が永正九年（一五一二）まで存在したことがわかり、先述した道澄寺廃絶時期に関する諸説のうち、①と②は成り立たないことになった。

ということ、道澄寺は永正九年以降のいずれかの時期に廃寺となり、鐘も外へ出て、大和国栄山寺に掛けられることになった。では、なぜ他の寺院ではなく栄山寺に移ったのか。その理由についても考えなければならぬが、与えられた文字数も尽きたので、機会を改めたいと思う。

道澄寺者從三位守
大納言兼右近衛大
將行皇太子傳藤原
朝臣參議左大辨從
四位上進行勘解由
長官攝磨權守橘朝
臣為縣四恩濟六趣
合誠勸力所建立也

銘文拓本 第一区

堂宇比雙南北輪象
尊像接座前後跏趺
兩相公宿殖香火之
緣生為臥葛之底非
唯現世結契開之情
亦欲淨刹興安養之
樂故各取其名首字
以為此寺額顯所以

第二区

胎本總持來代期同
志於他生也藤原相
爰命鳥匠乃鑄鳴鐘
且將合長夜昏迷開
妙聲而知曉苦海以
溺驚梵叫而通津延
喜十七年十一月三
日銘之其詞云

第三区

僊師施治菩提緣
虛受必應響萬自傳
從夕至曉出定入禪
傍唱衆聖遙警大仙
法喜增感耶夢驚眠
通阿鼻獄達有頂天
劫數億萬岳累三千
一音利益無限無邊

第四区



阿弥陀如来坐像 歡喜寺



○釈迦如来立像 法明寺



●薬師如来坐像 当館



○馬頭観音菩薩立像 浄瑠璃寺



○十一面観音菩薩立像 勝林寺

出陳一覽

なら仏像館開幕記念特別展

至宝の仏像

東大寺法華堂金剛力士像特別公開

7月21日～9月26日

なら仏像館

【特別公開】 第3室

●脱活乾漆金剛力士立像(法華堂所
在)(東大寺)

【観音菩薩】 第1室

○木造観音菩薩立像(観心寺)、○木
造観音菩薩立像(文化庁)、木造観音
菩薩立像(奈良国立博物館)、○木造
十一面観音菩薩立像(奈良)(薬師寺)、
○木造十一面観音菩薩立像(勝林寺)、
○木造十一面観音菩薩立像(地福寺)、
○木造十一面観音菩薩立像(浄瑠璃寺)
○木造十一面観音菩薩立像(平安)(薬
師寺)、○木造十一面観音菩薩立像(新
薬師寺)、○木造十一面観音菩薩立
像(松尾寺)、○木造十一面観音菩薩
立像(元興寺)、○木造千手観音菩薩
立像(園城寺)、○木造千手観音菩薩
立像(妙法院)、○木造如意輪観音菩
薩半跏像(奈良国立博物館)、○木造
不空羂索観音菩薩坐像(応現寺)、○
木造馬頭観音菩薩立像(浄瑠璃寺)

【護法の天部形】 第1室・第9室

○西大門勅額(東大寺)、○木造四天
王立像(海住山寺)、○木造増長天立
像(称名寺)、木造毘沙門天立像(奈良
国立博物館)、○木造十二神将立像(十
驅)(東大寺)、木造十二神将立像(十

二驅)(奈良国立博物館)

【如来】 第2室

○木造釈迦如来立像(法明寺)、○木
造薬師如来立像(元興寺)、○木造薬
師如来坐像(勝林寺)、○木造薬師如
来坐像(長隆寺)、木造阿弥陀如来坐
像(歡喜寺)、○木造宝冠阿弥陀如来
坐像(當麻寺)、○木造阿弥陀如来立
像(裸形像)(浄土寺)、木造如来立像
(奈良国立博物館)

【中国の石仏】 第4室

○石造三尊仏龕(奈良国立博物館)、
○石造三尊仏龕(個人)、○石造十一
面観音像龕(奈良国立博物館)、石造
如来頭部(雲岡)、石造菩薩頭部(雲岡)、
石造菩薩頭(響堂山)、石造螺髻像頭
部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島・金銅仏】 第4室

銅造誕生釈迦仏立像(個人)、銅造二
仏並坐像(奈良国立博物館)、銅造押
出五尊仏、銅造観音菩薩立像、銅造菩
薩坐像、銅造力士立像(三驅)(以上、
個人)、○銅造如来立像(光明寺)、銅
造如来立像(奈良国立博物館)

【菩薩】 第6室

○木造観音菩薩立像(細見美術財団)、
○木造観音菩薩立像(個人)、木造弥
勒菩薩立像(林小路町)、木造菩薩半
跏像(文化庁)、木造地藏菩薩立像(十
市町自治会)、○木造地藏菩薩立像(大
福寺)、○木造地藏菩薩立像(東大寺)、
○木造地藏菩薩立像(長命寺)

【明王】 第7室

○木造不動明王坐像(園城寺)、○木
造不動明王坐像(正寿院)、木造五大
明王坐像(五驅)、○木造愛染明王坐
像(以上、奈良国立博物館)

【檀像】 第8室

●木造薬師如来坐像(奈良国立博物
館)、○木造弥勒如来坐像(東大寺)、
○木造観音菩薩立像(本山寺)、○木
造十一面観音菩薩立像(海住山寺)、
○木造十一面観音菩薩立像(奈良国
立博物館)、○木造諸尊仏龕(寂照寺)、
○木造諸尊仏龕(個人)

【上代の金銅仏】 第8室

○銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、銅
造誕生釈迦仏立像(個人)、銅造如来
立像(奈良国立博物館)、銅造菩薩立
像(興福院)、○銅造観音菩薩立像(金
剛寺)、○銅造観音菩薩立像(観心寺)、
銅造観音菩薩立像(個人)、○銅造菩
薩半跏像(神野寺)、○銅造菩薩半跏
像(東大寺)、銅造観音菩薩立像(奈
良国立博物館)

【肖像】 第10室

○木造大津皇子坐像(薬師寺)、○木
造聖德太子立像(孝養太子)(成福寺)、
木造南無仏太子立像(奈良国立博物
館)、木造役行者倚像(個人)

【神仏習合】 第11室

●木造八幡三神坐像(三驅)(薬師寺)、
○木造大將軍神坐像(大將軍八神社)、
木造大將軍神坐像、木造伊豆山権現
立像、木造男神坐像(二驅)(以上、

奈良国立博物館)、○銅造蔵王権現
立像(二驅)(大峯山寺)、銅造金剛童
子立像(奈良国立博物館)

【百鳳・天平の名品】 第12室

○木造菩薩立像(金龍寺)、○銅造誕
生釈迦仏立像及灌仏盤(東大寺)、○
銅造薬師如来坐像(奈良国立博物館)、
●銅板法華説相図(長谷寺)

【仮面】 第13室

○舞楽面(新鳥蘇(春日大社)、○舞
楽面(胡德楽勸杯)、○舞楽面(胡德
楽瓶子取)(以上、手向山八幡宮)、○
舞楽面(陵王・貴徳)(東大寺)、舞
楽面(二の舞・雁面)(奈良国立博物館)、
舞楽面(還城楽)、舞楽面(胡德楽)(以
上、個人)、○行道面(菩薩(三面)(浄
土寺)、能面(平太・喝食・瘦女・不動)
(根来寺)

中国古代青銅器

7月21日～9月26日

青銅器館 坂本コレクション

中国古代の商(殷)から漢代に製作さ
れた、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、斚、方彝、
盃、壺、鐘、鈚、扁壺、蒜頭壺、甗、博
山炉、鎮子、鏡、鐙など(奈良国立博
物館)

●国宝 ●重要文化財

※すべての展示において、出陳作品を
一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

金剛力士立像 阿形（法華堂所在）

脱活乾漆造
奈良 東大寺
国宝

東大寺法華堂の須弥壇上に安置される脱活乾漆造の巨像群のうちの一軀、金剛力士像の阿形である。甲冑を身につけ、左手は肘を張りつつ拳を下方向に突き下げ、右手は上方に振り上げる。今は持物の大半を失うが、右手には、対をなす吽形像同様に、長大な金剛杵を握りしめていた。左足を開きつつ腰を右にひねり、顔を左方向に向け、開口し、髪を逆立てて烈しく怒号する。向かい合う吽形像がエネルギーを内に秘める「静」のかまえであるのに対し、阿形像はパワーを炸裂させる「動」のかまえと見ることができよう。

金剛力士はすなわち二王（仁王）のことであり、ふつう二王といえど、下半身に裙をまとったが、上半身は裸体で、筋肉を隆起させる姿が思い浮かぶ。このような見慣れた半裸の二王の伝統もわが国には古くからあり、和銅四年（七一）に完成した法隆寺中門の塑造金剛力士像や、制作年代に諸説あるものの、七世紀末頃かと思われる長谷寺法華説相図中の力士像があげられる。

これに比べ、着甲の姿の本像はその異風が際だつ存在で、日本の金剛力士像のなかでは、法華堂像のほかは、本像を写した可能性のある東大寺西大門勅額中の力士像（鎌倉時代）がある程度である。

しかし大陸に目を向けると、数こそ多くないながら、甲冑を身につけた金剛力士像も散見する。着甲の武装形ということだけでは四天王ないし二天王との分別が困難であるが、金剛杵を手にとるという点を指標にするなら、西域のキジル石窟壁画や、炳靈寺石窟第一六九窟、あるいは雲岡石窟第九十窟にも認められる。後二者はいずれも北魏時代のものであるが、その後の中国における作例を通覧すると、甲冑をまとわないものが増え、主流となつてゆく。

その意味では、すでに半裸像が成立していた日本に、新たに着甲像が導入されたわけであり、中国における展開とは逆の動きであったといわねばならない。その背景にはどのような事情があったのか、にわかには説明しがたいが、あるいは遣唐使の持ち帰った何らかの文物が契機となつたのではあるまいか等、想像はふくらむ。

岩田 茂樹（当館学芸部長補佐）

● 公開講座 ●

7月31日（土） 「仏像修理100年よもやま話－修理にかかわって50年－」
小野寺 久幸（財団法人美術院常務理事）

9月11日（土） 「展示概説 仏像修理100年」
鈴木 喜博（当館学芸部上席研究員）

時間：各回とも 午後1時30分～3時（午後1時開場）
会場：当館 講堂
定員：196名（先着順。午後1時より、講堂入口で入場券を配布します）
料金：無料
※入場の際には、特別展の観覧券もしくはその半券をご提示ください

● サンデートーク ●

第4回 7月25日（日） 「病と仏教－平安貴族の疾病観－」
齋木 涼子（当館学芸部研究員）
第5回 8月22日（日） 「梵鐘銘と私」
野尻 忠（当館学芸部研究員）
第6回 9月19日（日） 「法隆寺金堂、三組の四天王像とその謎」
岩田 茂樹（当館学芸部長補佐）

※各回とも午後2時～3時30分（開場は午後1時30分）。当館講堂にて。
定員196名（先着順）。聴講無料

● その他のイベント ●

奈良国立博物館で「特別展 仏像修理100年」と「なら仏像館開幕記念特別展 至宝の仏像 東大寺法華堂金剛力士像特別公開」を開催中の夏休み期間、博物館周辺ではさまざまなイベントが開催されています。ぜひあわせてお楽しみください。

全国光とあかり祭 7月31日（土）～8月4日（水）
※各日とも午後7時～9時30分
なら燈花会 8月5日（木）～14日（土）
※各日とも午後7時～9時45分
バサラ祭り（奈良バサラ） 8月29日（日）

◆奈良国立博物館賛助会

2010年7月1日現在、一般会員（個人）32名、一般会員（団体）16団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。

● 第39回 奈良国立博物館 夏季講座 ●

「仏像修理100年と仏像研究の現在」

開催日：平成22年8月24日（火）～26日（木）
主 催：奈良国立博物館・奈良女子大学
会 場：奈良女子大学 講堂（近鉄奈良駅から徒歩約5分）

8月24日（火） 受付9時30分～/開会10時30分～
① 特別講演「彫刻史研究と仏像の保存修理」
西川 杏太郎（財団法人美術院理事長）
②「滋賀の仏像の保存修理の思い出」
宮本 忠雄（元滋賀県教育委員会/元滋賀県立琵琶湖文化館長）
③「仏像修理の現在」
奥 健夫（文化庁主任文化財調査官）
8月25日（水） 受付9時～/講座開始9時20分～
①「回想：東大寺南大門の仁王像の修理」
鈴木 喜博（奈良国立博物館学芸部上席研究員）
②「清涼寺釈迦如来像をめぐる」
井上 一穂（同志社大学教授）
③「仏像——研究と鑑賞のあいだで」
副島 弘道（大正大学教授）
④「肖像彫刻研究とその課題」
根立 研介（京都大学大学院教授）

8月26日（木） 受付9時～/講座開始9時20分～
①「運慶と靈驗仏」
瀬谷 貴之（神奈川県立金沢文庫学芸員）
②「奈良国立博物館保管の仏像に関する二、三の知見」
岩田 茂樹（奈良国立博物館学芸部長補佐）

※26日午後は、奈良国立博物館にて特別展を見学（午後6時まで）。その後、自由解散

◆受講料：3,000円

※テキスト代などを含みます。受付け決定後に振り込んでいただきます。

◆定 員：400名

※応募多数の場合は奈良国立博物館友の会メンバーを優先し、なお多数の場合は抽選で決定します。

◆応募方法： 往復はがき による、郵送に限ります。

※往復はがきに「夏季講座参加希望」と書き、[氏名・住所・郵便番号・電話番号・性別・年齢]を明記して下さい。奈良国立博物館友の会のメンバーの方は、友の会カード番号もお書きください。

※返信用はがきには宛名を記入してください。

※はがき1枚につき申込者1名としてください。

◆応募締め切り：7月23日（金） 必着

※受付けの可否を7月30日（金）までにご連絡します。

申し込み先：〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館教育室
問い合わせ先：教育室 電話 0742-22-4464 FAX 0742-22-7221

展示評

圧倒された「大遣唐使展」

―物が語る古代の対外交流―

佐藤 信

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

今年、平城遷都一三〇〇周年ということで、平城宮第一次大極殿の建物復元をはじめ、一三〇〇年祭など多様なイベントが奈良の地で開かれつつある。奈良国立博物館の特別展「大遣唐使展」も、その一つに数えられよう。古代史研究がこれだけ国際的交流を重視するようになったなかで、名高い「遣唐使」に直接焦点をあてた展示はこれまでなかったのではないかと、大いに期待をもつて鑑賞させてもらった。そして結論として、その期待に十二分に答えてくれる素晴らしい展示であった。



実は、かねて展示会の名称に「大」字を無闇に付けることには批判的な意見を抱いていた。「本家」や「元祖」を争うようなことは公平・正当な文化財の展示にはふさわしくないという考えである。しかし、今回の展示に限っては、まさに「大」が付いておかしくない多彩で豊富な質と規模の展示でもつて理解できた。私の場合、四月のある土曜日の一時間ではとても見切れず翌日さらに三時間近く見学したが、まだ後ろ髪を引かれる思いが強く、のちにもう一度訪れたもののこ

の時は入館の行列を見てあきらめたほどであった。

七世紀の遣唐使派遣から九世紀末の菅原道真の建言による遣唐使の停止まで、海外のものでは吉備大臣入唐絵巻、井真成墓誌、石仏や西安碑林の金石文拓本など普段なかなか目にできないものももちろん、国内のものも、遣唐使将来品や金石文・出土品をはじめ宮内庁の法華義疏、中宮寺の天寿国繡帳や道明寺天満宮の菅原道真の関係遺品など、国宝・重要文化財が惜しげもなくオンパレードのように並んでいた。遣唐使・留学生・留学僧として名高い人々に関係する品々にも、配慮が行き届いている。奈良・平安時代の対外交流の歴史を展望する「物」(歴史資料)については、思い浮かぶ物をほとんど網羅する「品揃え」であり、古代史を学ぶ者としては、その一つ一つに垂涎しつつ至福の時間を過ごさせてもらった。

敢えて気になった点を挙げれば、耐震工事のため新館の半分が使えなかったこともあり、本館の廊下的なコーナーの左右に素晴らしい品々が並んでいたが、その部分を往復する展示の導線が見づらかったこと、分かりやすい展示物ではあるものの、拓本などそれぞれの文物をもつて展示ストーリーの中で位置づけて欲しかったこと、などがあつた。

ただし、そのようなことはあとから思い起こすくらいで、古代の対外交流の歴史的理解に資するこれだけの幅広く充実した展示は、まさに「空前絶後」といつてよいだろう。この大規模展示を準備し、オープン前に大部な図録を編集された奈良国立博物館学芸部の想像を絶する努力には、ただ感謝するばかりである。

心配なのは、十年二十一年に一度という実感のあるこれだけの大展示を実現してしまうと、これから続く展示をいかに見劣りしないように企画するのか、博物館として大変困難な課題を背負うことになってしまったのではないか、という危惧である。

一時休館のお知らせ

当館は現在、耐震補強等の各種工事を進めております。そのために各館に一時休館の期間がございます。ご迷惑おかけいたしますが、何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

■全館休館■

耐震補強工事および大規模な展示替えのため、6月21日(月)～7月20日(火)、および9月27日(月)～10月8日(金)の間、全館休館いたします(ミュージアムショップ、レストランもお休みいたします)

■西新館の一時休館■

西新館は、耐震補強工事等のため、昨年11月中旬より一時休館しております。休館は本年(平成22年)10月までの予定です。

■仏教美術資料研究センターの一時休館■

仏教美術に関する図書や写真資料を収蔵し、一般に公開しております当館の「仏教美術資料研究センター」は、耐震補強工事にともない、昨年10月より一時休館しております。休館は平成23年3月末までの予定です。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円で観覧できます(共催展の場合は別途定めるものとします)。学生証(引率教職員は身分証明書)の提示をお願いいたします。

(会員大学等)大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、大阪樟蔭女子大学・大阪樟蔭女子大学短期大学部・樟蔭高等学校・樟蔭中学校、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都ノートルダム女子大学、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部、近畿大学大学院文芸学専攻、実践女子大学・実践女子短期大学、就実大学人文科学部、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)(2010年7月1日現在)

展示品の みどころ

うんちゅうくようほさつぞう 雲中供養菩薩像(南14号)

一軀
国宝
京都 平等院
木造 像高49.1cm
平安時代 天喜元年(1053)
修理 明治38～39年(1905～06)

鳳凰堂の堂内を荘厳する52軀の供養菩薩のひとつ。これらの群像は雲中供養菩薩と呼ばれ、本尊阿弥陀如来像を囲む上方の、長押より上の小壁、すなわち本尊奥の西面(左右)と南北の壁(二間分)に懸けられていたもの。乗雲する姿は、西方浄土の阿弥陀如来を供養讃嘆し、浄土の虚空を飛翔する相をあらわしている。本尊阿弥陀如来像と同じく、大仏師定朝の指揮下で、天喜元年(1053)に造られたもの。平安時代の王朝美術の名品であり、当代の優美な造形感覚を代表する仏像である。28軀が楽器を手にしており、本像(南14号)は羯鼓を奏している。壁に懸けられる性格上、レリーフのようにみえるが、ほぼ丸彫りの立体彫刻である。その構造は意外に複雑で、頭部と体部は別材製。頭部は前後^は、差し首。体部は上下二材^{うしろ}、ともに前後に割って内削りしている。その仕様は入念であるといえよう。本像は明治38年(1905)から翌年にかけて修理されており、古社寺保存法にもとづく近代修理の一例として、当館主催の特別展「仏像修理100年」に出陳される。展覧会準備期間中に、この時の修理図(冊子本)の所在が確認された(右下図)。それをみると、補足および補修箇所が明解に色分けされており、従来いわれてきたように、本格的な解体修理であったことが了解される。このような記録法は百年を過ぎた今日まで続いているもので、文化財修理の特色のひとつである。今回の特別展ではこ



のことが比較対照できるように、この冊子もあわせて展示する。「仏像修理の文化」という視点を実感していただければ幸いである。

鈴木喜博(当館学芸部上席研究員)

※特別展「仏像修理100年」にて、7月21日～9月26日に展示



開館予定(7月～9月)

■開館時間

7月21日～8月31日 午前9時30分～午後6時
9月1日～26日 午前9時30分～午後5時
※ただし、7月31日(土)～8月15日(日)および
毎週金曜日は午後7時まで

※いずれも、入館は、閉館の30分前まで

■休館日

毎週月曜日(ただし8月16日と9月20日は開館し、
9月21日(火)は休館)
7月1日(木)～20日(火)
9月27日(月)～10月8日(金)

観覧料金

□特別展「仏像修理100年」「至宝の仏像」

	一 般	大学生・高校生
個人(当日)	1,000円	700円
団体・前売	900円	600円

- *中学生以下は無料です。
- *団体は20名以上です。
- *障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。
- *毎月22日は「夫婦の日」として、ご夫婦で観覧される方は一般料金の半額で観覧できます。
- *この料金で、同時開催の2つの特別展、および青銅器館の展示を観覧できます。



[交通案内] 近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。

※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。



奈良国立博物館
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内)
ハローダイヤル 050-5542-8600
ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>